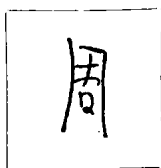


周五郎全集

第十一卷

講談社



山本周五郎全集

第11卷 改訂御定法

昭和39年8月20日 第1刷発行

定価 480円

著者 山本周五郎

発行者 野間省一

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽町3ノ19

電話 東京(942)1111(大代表)

振替 東京3930

© Shugoro Yamamoto 1964

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

山本周五郎全集 第十一卷 目次

暴風雨の中

三

秋の駕籠

三

雪と泥

四

葦は見ていた

五

みずぐるま

六

鶉

二

扇野

一三

ひとでなし

一六

橋の下

一八

やぶからし

二〇三

あすなろう

二〇七

榎物語

二〇九

饒舌り過ぎる

二一三

十八条乙

二二一

源藏ヶ原

二二七

改訂御定法

二三三

解説 久保田正文

二七五

デザイン 伊藤憲治

暴
風
雨
の
中

一

烈風と豪雨が荒れ狂っていた。氾濫した隅田川の水は、すでにこの家の床を浸し、なお強い勢いで増水しつつあった。昨日の未明からまる一日半、大量の雨を伴って吹きおとした南の烈風は、ようやくいまやみそうなけはいをみせ始めていた。まだ少しも弱まってはいいないが、ときおり喘ぎのように途切れるし、空を掩って低くはしる雲の動きも、いくらか緩くなつてゆくようであった。

三之助は二階の六畳に寝ころんでいた。

二階には部屋が三つあり、その六畳は東の端になつていた。間の襖があけてあるので、他の二部屋も見とおすことができる。そこには畳や襖障子や、その他の家具、箆箆や長持や火鉢や、なにかの箱などがぎっしり積み上げてあつた。吹き飛ばされた雨戸の隙からさし込む光が、それらの家具を片明りに、ほの暗く映しだしていた。それは階下から運びあげたものであつた。この家の人たちはそれらの物を運びあげて、朝はやく、まだ暗いうちに逃げていった。

「悪くはなかった、これも一生だ」三之助は口の中で呟やいた、「おれはおれなりに自分の一生を持つたんだ」

縞の単衣の胸がはだけ、三尺帯がとけかかっていた。少し痩せてはいるが筋肉のよく緊つた、精悍そうな軀つきで

ある。顔は白っぽく乾いていた。こけた頬や骨ばつた頸のあたりに、激しい疲労と弛緩の色があらわれていた。疲れきつて虚脱しているようであつた。なにもかも、身も心も投げだしたというふうにみえた。

「生れてきたことはよかつた」こんどははっきりと呟やいた、「生れてこないよりは、やっぱり生れてきたほうがよかつた、飢えや、寒さや、辛い、苦しいことが多かつた、そうだったか、……いつもおれは逃げだすことばかり考えていた、そしていつも逃げだした、逃げださなければもっと悪いことが起つただろう、……こんどは逃げなかつた、逃げだすことができなかつた、そして、こうするほかに手はなくなつた」

彼の表情が変つた。風と雨の音が家を押し包んでいた。乱打する太鼓の中にでもいるように、その荒れ狂う音が部屋いっぱい反響した。三之助の眼は憎悪の光りを帯びた。唇も憎悪のために歪んだ。しかしその表情はすぐに消え、彼は頭をゆらゆらと揺つて、眼をつむつた。

「おれはこの腕でおぎんを抱いた」彼はまた呟やいた。「おたいやお幸や、まさ公を抱いた、抱いたり撫でたり、殴つたこともあつた。……あいつらは泣いたり、嘔みついたり、爪を立てたりした、あいつらはおれのこの肩や腕に、爪や歯の痕をつけた、あいつらはこの頬べたや胸を、あいつらの涙で濡らした、なま温かい塩っからい涙で……おれはその温かさや塩っばさを味わつた」

生れてきたからこそ、その味を知ることができたんだ。

三之助はそう続けた。しかし、その呟きはあまりに低く、殆んど声にはならなかった。突風がするどく咆え、戸や羽目板へぎぎッと雨を叩きつけた。まるで砂礫を叩きつけるような音であった。家ぜんたいが悲鳴をあげて揺れ、階下で壁の崩れるらしい物音がした。三之助は「ふしぎだ」と呟やいた。ほんの一瞬、風が途絶えようと、どこかでごぼごぼと重たく水の鳴る音が聞えた。どこか地面に穴があいて、そこへ水が吸込まれるような音であった。

「どういうわけだろう」彼は首を捻った。眼はつむったままであった。「ほかのことはよく思出せない、飢えも寒さも、骨の痺れるほど辛い苦しいおもいをしたことも、まるで遠い景色のようにぼやけてしまっている、思いだせるのはあいつらのことだけだ、抱いてくどいたり、泣かせたり殴ったりして、みんな別れてしまった、みんな長くは続かなかった……おたいはほかの誰とも似ていなかった、おぎんも、お幸も、まさ公も、みんなほかの者とは違っていたが、そのくせほかの女たちと同じだった、少し馴染むとそれがわかった、ひとりひとりとは違うのに、みんなほかの女たちと同じものを持っていた、おれのなにより嫌いなものを、……おれは逃げだした、逃げ出さずにはいられなかった、……けれども、それだけじゃなかった」彼は眼をあい、ぼんやり天井を見まもった。「そうじゃねえ、嫌いなものじゃあねえ、ただ嫌いというのじゃあねえ、なにかし

ら、……そうだ、それとはべつのものだ、おれを逃げださせたのはそのほかのものだ」

はつと三之助は首をあげた。この家の北側のどこかへなにかの突当る音がした。音というよりは響きであった、そうひどくはないが、たしかになにかが突当ったようだ。

「——あの娘かもしれねえ」

三之助は自分に言った。

「きつとそうだ、おしげだ」

首をあげたまま、三之助はじつと耳をすました。風雨の音のなかから、次に起るであろう物音を聞き取ろうとした。二階の屋根瓦が飛ばされたらしい、からからと音がして、うしろの庇へ落ちるのが聞えた。三之助は立って、廊下へ出た。きつと雨が顔を打った。吹飛ばされた雨戸の間から、鼠色に濁ったいちめんの水が見えた。彼は風と雨に叩かれながら、半身を乗りだして、いま物音のした方を覗いて見た。しかしそれらしい物はなにも見当らなかった。

風景はすっかり変っていた。

千住大橋の上から東に向かって流れる川が、そこで大きく南へぐつと曲っていた。そこはその曲っている川へつき出た地形だった、不規則な三角形の突端のような場所に、地盛りをしてこの家は建っていた。対岸には水神の森があり、少し下流には真崎稲荷の森があった。水神の森に続いて向島堤の桜並木が見える筈であった。しかし今はそれが見えなかった、水神の森も半ば水に浸されて、灌木の繁み

のようになり、烈風に薙ぎ倒されては、その梢で水を掃くさまが、豪雨をおしておぼつかなく眺められた。

男が一人、ずぶ濡れになって、廊下の西の端から、この二階へ迂り込んだ。三之助は外を見ていた。その男は裏から屋根づたいに廻って来たらしかった。そして、吹飛ばされた雨戸の間から、手摺を跨いで（かなりすばしく）中へ迂り込んだのであった。

三之助は外を見ていた。どっちを見ても鼠色の水であった、どこにも地面は見えなかった。風のために波立っているが、水は流れているようではなかった。洪水という激しきは感じられなかった。雨にかき消される彼方まで、重おもしく漫漫とひろがっていた。けれどもそれが休まずに増水していることは慥かだった、眼に見えぬちからで、じりじりと、それはもう階下を半ば以上も浸していた。まもなく軒庇までつきそうであった。

「おめえ舟で来たのか」
三之助が言った。彼は外を見たままで、ごくしぜんにそう言った。

二

風が襲いかかり、三之助の捉まっている雨戸が、危なく吹き飛ばされそうになった。三之助は部屋へ戻りながら、もういちど言った。

「おめえ舟で来たのか」

こんどはまえより高い声であった。そして彼はそこへ坐った。男はぎょっとした。男は次の八畳にいたが、積んである家具の間で、慌てて濡れた手足を拭きながら、なにか答えた。合羽を衣っていたので、めくら縞の長絆纏はどうやら乾いているが、髪の毛からはまだ水が垂れた。

「断わりなしに入っちまったが」男は頭を拭きながら、こんどは大きな声で言った、「邪魔をしてもいいかね親分」
「舟の当る音がしたっけ」三之助は言った、「おめえ舟で来たんだな」

「小塚っ原から水だった」男は言った、「ちっとばかり櫓が使えるんで、思いきって漕ぎだしたんだが、いけねえ、千住大橋のところまで流れに押されてどうにも突っ切れねえ、死にも狂いでやっとこの家まで漕ぎつけたんだ、いっとき、もうだめだと思った」

男はこっちへ来た。三十五六の小柄な男だった。柄は小さいが骨太で、がっちりしていた。手足も太く、指はごつごつしているが、どこかに敏捷な、ばねのような強靱なものを感じられた。毛深いたちらしい、頬から顎にかけて硬そうな無精髭が伸びていた。唇は厚く、角張ったまろい顔の中で、小さな細い眼がするどく動いた。その眼はねばり強く、どんなことにもめげない光を帯びていた。

「おらあ親方なんて者じゃあねえ」三之助が言った、「またこれはおれの家じゃあねえ、ちっとも遠慮することなかねえんだ」

男は三之助と斜交しかいに坐った。それから蓑入と燧袋を出して、煙草を吸いつけた。

「こんな処に家があるとは気がつかなかった」男が言った、「いったいどんな人の家なんだね」

「船七の隠居所さ、隠居所で、客の会席にも使ってたんだ」

「船七ってえと、大橋の脇の船宿かね」

「おしげ、ってえ看板娘がいる、おめえ知ってるんだらう」

「おらあ」男は煙草に噎おどせた、「おらあ、船七って名だけは知ってるが、……千住大橋の脇にそんな船宿があるってことは聞いていたがね」

風で激しく雨戸が鳴り、男の言葉は聞えなくなった。三之助はほどけかかっていた三尺帯を巻き直し、そこへ寝ころんで肱枕をした。男はそれを横眼で見た、その眼がきらりと光った。男は片膝を立て、きせるを持ち直した。すると三之助が男の方を見た。男は急に咳きこんだ。

「なにか言ったかい」

「この家はその」男は吃おどった、「この水を、持ちこたえるだらうか、もう暴風雨はおさまりそうに見えるし、水もこれ以上のことはねえと思うが」

「どうだかな」三之助は唇で笑った、「この家は土盛りをして建てたものだ、七月の大しけのときに土台の石垣が崩された、それを直す暇がなかったんだ、……だから、この家の人たちは朝はやく逃げだしたのさ、命が惜しかったら

一緒に逃げろって、おれにも諄まごく言いながらよ」

「だがおめえはそこにいるぜ」

三之助は黙って、また唇で笑った。男は疑わしげに、そして念を押すように言った。

「おめえは逃げなかった、まさかこの家がだめだと知って残ったわけでもねえだらうが」

「どうだかな」

「おめえおれを威かすつもりか」

「ちよいと聞いてみな」三之助が言った、「下の方でござ音ねがしているから畳へ耳をつけるとはっきり聞えるぜ」

男は耳をすませた。それから畳へ耳をつけた。

「土台のどこかに穴があいてるんだ」三之助が言った、

「崩れた石垣がどうかして、この家の土台の下に水の抜ける穴があいたんだらう、この音はそこから水の抜ける音だ、さつきよりずっと大きくなってるが、そうさ、こいつがもつと大きくなれば、この家はたぶんぶっ倒れるか、水に掠さらわれるかするだらうぜ」

「じゃあなぜ逃げねえんだ、そうとわかっていて、なぜ逃げるくふうをしねえんだ」

三之助はからかうような眼で男を見た。

「おめえを威かしたってしようがねえ」三之助は言った、「威かすつもりなんぞこれっぽっちもありゃあしねえ、おれが此処こゝにいるのは、この家がぶっ倒れるか、水に掠さらわれ

るかするだろうと思つたからだ」

「なんだって」

「聞き返すことあねえや、その暇におめえやることがあるんだらう、やる事があつて此処へ来たんだらう、そうじゃあねえのか」

男の眼が絞るように細くなつた。その眼ですばやく、三之助の顔を見やった。風がどつと襲いかかり、家ぜんたいが揺れた。裏手のほうでどこかの板のひき裂ける音がし、なにかが尻をぎしぎしと擦つた。その聞き馴れない音に続いて、また板の裂ける音がし、そのまま咆えたける風雨のためにかき消された。

「おれが、なにをしに来たつて」

「待つことはねえつてんだ」三之助が言つた。「おめえがなにをしに来たかは初めからわかつてゐる、入つて来たときのおめえの身ごなしと眼つきで、おれにやあすぐわかつたんだ」

男はきせるを置いた。三之助は寝ころんで肱枕をしたままで顎をしゃくつた。

「早くやんねえ、おらあ手向いはしねえよ、おらあこの家と一緒に自分の片をつけるつもりだった、今でもそのつもりなんだ、ひとおもいにきっぱりとな、……おらあ決して手向いはしねえぜ」

「それは本気か」男は右手をふところへ入れた、「本当に手向いはしねえか」

「おめえは律義らしいな」

「お上にも慈悲がある、神妙にすれば」

突風が来て雨戸を一枚また吹き飛ばし、部屋の中まで横さまに雨が吹き込んだ。男は身構えをしながら三之助を睨んだ。

「神妙にすればお上にも慈悲がある、神妙にお繩を受けるか」

「お慈悲だつて」三之助の表情がするどく歪んだ、眼に憎悪の色があらわれた。しかしそれは殆んど瞬間のことで、すぐにまた嘲けりと倦怠の顔つきに戻つた。「ふん、お慈悲はこつちから進上、と言つてえが、まあいいや、早いとこやつてくれ、さもねえとおめえもこの家と一緒に」

男は三之助にとびかかつた。相手が寝ころんでいるにしては、びしびしと容赦のない動作だつた。三之助は二度ばかり「うっ」と声をあげたが、反抗はしなかつた。男は三之助をうしろ手に縛りあげ、壁際へひき据えて、立ちあがつた。彼の顔は蒼く硬ばつて、醜く歪んでいた。彼はふところから十手を出し、三之助の肩を（作法どおり）打ちながら言つた。

「——佃の三之助、御用だぞ」

十手の古びた朱房が三之助の頬を撫でた。三之助は壁へ背を凭せてあぐらをかきながら男を見あげた。そうして、低く笑つた。

「やっぱりおめえは律義なんだな」

「黙れ、もうむだ口はきかせねえぞ」

男は三之助を睨みつけた。

三

「むだ口か、ふっ」三之助は肩を揺った。「それより舟を見て来たらどうだ、おめえの乗って来た舟をよ、その方が大事じゃあねえのか」

男はぎょっとした。彼は十手をふところへ差し込み、慌てて隣りの部屋の方へいった。三之助は皮肉な冷笑をうかべながら、男が合羽を衣る音や、廊下から屋根へ出てゆくのを聞いていた。僅かなあいだに、風の勢おいは衰えていた。突風はまだ相当に烈しいが、途絶える時間が少しずつ延びてきた。

「おーい」裏の屋根で男の叫ぶのが聞えた、「おーい、……おーい」

三之助は左右の肩を捻った。繩がくいこんで痛いらしい、だが、もがけば繩はさらに緊った。三之助は舌打ちをして、勝手にしろというように、また壁へ凭れかかった。

男が戻って来た。合羽をかぶっていたのに、長絆纏の前はずっくり濡れていた。彼は顔や頭を拭きながら、廊下へ出ていって外を眺め、それから三之助の前へ来て坐った。

水が軒庇についたのだから、たぶたぶと重く、下から庇板を打つ音が聞えだした。水面は驚くほど高くなっている。それは三之助の位置からも見えた、あけてある障子

と、兩戸の隙間越しに、……濁ってふくれあがる水の面を、斜めに篠をなして豪雨が叩くので、いちめんに灰色のしぶきが立っていた。

「惜しいことに舟の繋ぎようを知らなかった、繋ぐ場所も悪かったらしいな」三之助が言った。「おれにやあ聞えたが、繋いだ籠網が繋がれたところをひっぺがした、舟はそのまま流れていったようだ、そんなような音をおらあ聞いたぜ」

「だから逃げられるとでも思うのか」

「——おれがか」

「おらあ武井屋の佐平ってえ者だ」男はきせるを拾った、「気の毒だがいちどお繩にした以上、どんなことがあつたって逃がしやあしねえから、そのつもりでいろ」

三之助はふんと言った。そのときどしんと、なにかが家へぶつかった。流れて来た材木かなにからしい、重たげな響きと共に、家ぜんたいがぐらぐらと揺れた。男は浮き腰になった、外へでもとびだしそうな恰好をみせたが、すぐに坐り直して、きせるを逆に持った。

「おめえは松島町で人をあやめた」男は三之助を見て言った、「日本橋松島町の家主、油屋仁兵衛を短刀でやった、それに間違えはねえだろうな」

「此処で口書きでも取ろうってのか」

「おれの言うことに返答をしろ、それから口のききようを改ためるんだ」男は言った、「そんな口のききようをする

と痛いめをみせるぞ」

三之助は黙った。

「おめえの気の毒な身の上はたいがいわかつてる」男は言った、調子は厳しいが思い遣りのあるような口ぶりであった、「おやしは佃島の漁師で政吉、おふくろはいち、ちといつたな、おめえを入れて子供が四人、千吉、よね、伊三郎、おめえはよねの下で二男坊の筈だ」

「おらあ勘当されたんだ」三之助は眼をつむった、「十五の年に勘当されて、人別もぬかれたんだ、おれにゃあきようだいなんかありやしねえ」

「おめえがぐれたわけも知ってるぜ」

佐平という男は言った。三之助の家はごく貧しかった。

父の政吉は愚直で、酒も煙草ものまず、人に騙されたり利用されたりするばかりだった。おれは貧乏籤をひくためにこの世へ生れてきたようなものだ、いつもそう言っていたが、長男の千吉が十一のとき、漁に出て疾風はやてに遭って死んだ。そのとき三之助は六つ、末っ子の伊三郎は二つだった。珍らしいことではない、母親と四人の子はその日から生活に追われだした。八つになるよねは子守りに出し、いちと千吉とは佃煮と貝の行商を始めた。

「おめえはいつも放っておかれた」と男は言った、「おふくろは千吉と一緒に伊三郎を背負ってでかける、おめえだけは家に残された、まわりは漁師町、遊びなかまは乱暴でだらしない連中が多い、これで悪くならなければふしぎ

なくらいだ」

三之助は悪童だった。佃でも築地河岸の方でも、たちまち名を知られ、爪はじきをされるようになった。そのままいたら、やがては島から追い出されたにちがいない。彼は職人になるのだといって、十二の年に茅場町の「指金」へ弟子入りをした。指金はそのころ江戸でも名うての指物職だったが、三之助は半年そこそこでとびだし、両国橋の「船辰」という船宿へころげ込んだ。それからは喧嘩と賭博で、十七八のときにはもう、佃の三之助とっており名が付いていた。

「兄貴の千吉は漁師になった」と男は続けて言った、「今でも佃島でまじめに漁師をしている、およねも漁師の嫁になった、末っ子の伊三郎は桶屋の職人で、これも世帯をもっている、ぐれたのはおめえだけだ、船宿の船頭ではない腕だそうだが、喧嘩と博奕はやまず、女でいりはやまず、こんどはどうとう人をあやめるということまでした」

「そのとおりだ、おめえはよく知ってる、よく調べが届いたもんだ」三之助が言った、「しかしおめえは知っちゃあいなねえ、おめえにはなんにもわかりやしねえよ」

「なにがわからねえっていうんだ、なにがだ」

「おめえにゃあ縁のねえことさ」三之助は頭を壁へ凭せかけた、「暢気にそんな口書をとるより、此処からぬけだす算段をしたらどうだ、土台の穴も大きくなるばかりだし、もうじき水が二階へつきそうだぜ、親方」

「おれがなにを知らねえってんだ、言ってみろ、おれがなにがわからねえってんだ」

三之助は黙っていた。眼をつむって、じっと暴風雨の音に聞きいるようすだった。凭れている壁から後頭へ、じかにいろいろな物音が伝わってくる。階下の土台のあたりの、ごぼごぼと鳴るあの音は、今ではもうべつもの、もっと大きな響きになっていた。家の柱は絶えずぶるぶると震え、流れて来る物が当るたびに、家ぜんたいがみじめに揺れた。

「おれのおふくろは泥棒だと言われた」三之助が独り言のように言った、「いつも佃煮を売りにゆく顧客こくかくさきで、握り飯を五つ盗んだからだ、鉄砲洲の質屋が近火に遭って、手伝いに来た出入りの者たちに炊出しをした、酒肴、握り飯や煮物がずらりと並んでた、誰でも取って喰べ放題、飲み放題だった、……おふくろはもろん手伝いにいったわけじゃあねえ、佃煮を売りに寄って、ふらふらとそいつに手が出たんだ」

そのとき一家は飢えていた。母子五人（およ、ねも子守り先から帰っていた）、が四五日なにも喰べない状態だった。特にこれという理由はない、飢えるのは常のことだった。条件のごく些細な変化にも、一家はすぐに食えなくなるし、食えないことには馴れていた。けれどもそのときはひどかった、啜る粥さえも無かったのである。……質屋の下女がそれを見ていた、おいちが握り飯を五つ、竹の皮に

包むのを見ていて、やはり佃島から小魚を売りにゆく漁師に、それを話した。

——おい、さんは泥棒をした。

狭い島のなかで、噂はすぐに弘まった。子供たちは泥棒の子と呼ばれた。

四

「その握り飯が手伝いに来た人間に出されたものだとするば」と男が言った、「おめえのおふくろのしたことは泥棒だ、たとえ一家が飢えていたにしろ、おめえのおふくろはそいつに手を出しちゃあいけないかったんだ」

「おめえ一家で飢えたことがあるのか、親分」

「おらあまっとうな人間だ」佐平という男はいきり立って、「まっとうな人間は一家を飢えさせるようなまねはしねえ、一家を飢えさせるようなやつは人間の屑だ」
「まったくだ、おれもそう思うぜ」

三之助は歯をみせて笑った。

「そういうやつらは」と男は憎にくしげに言った、「てめえの能無しを棚にあげて世間を怨むんだ、まっとうに暮している者や金持を憎んで、てめえが食えねえのはそういう人たちのためだなどとぬかす、そうしてしめえにゃあ悪事をはたらくようになるんだ」

「そのとおりで、おめえの言うとおりで、親方」

「てめえおれを笑うのか」男は辱しめられでもしたように

嚇となった、「さんざっぱら世間に迷惑をかけて、女を幾人も泣かして、しまいにや人をあやめさせししながら、てめえは自分が悪かったとは思っちゃあいいねえんだらう」

「善いとも思っちゃいねえよ」

「自分が悪いとはこれっぽっちも思っちゃあいいねえんだらう」

「善いとも思っちゃあいいねえさ、本当だぜ親方」三之助は言った、「おれが仁兵衛をやったのは善いことたあ思わねえ、悪いことかもしれないねえ、そいつはなんとも言えねえが、おらあやらずにはいられなかった」

「なんとも言えねえって」

「そうなんだ、おれは仁兵衛を短刀でやったが、あの爺いはおれが短刀でやった以上のことを、金と強慾でやってたんだ」三之助の唇が歪んだ、「あの爺いは家主としても鬼のようなやつだったが、そのうえ法外な高利貸をして、貧乏人の血をしぼるようなまねをしていた、あいつのために娘を売った者、親子きょうだいが別れ別れになったり、裸で街へ放りだされた者が、どのくらいあるか親方は知っちゃあいいえ、それだけじゃあねえ、あいつに金が返せねえために、あいつの長屋で首を吊った婆さんがあった、久松町では大川へ身投げをしたかみさんがいる、ついこのあいだも、あいつの長屋で娘が一人、身を売られるのがいやさに井戸へとび込んで死んだ、……おれの知っているだけでも、あいつのために三人の人間が死んでるんだ、刃物こ

そ使わねえが、あいつは三人も人を殺してるんだ、あいつこそ人殺しだ」

「それがおめえとなんの関係がある」男が言った、「油屋がもしそんな非道なことをしたんなら、された本人がお上へ訴えて出ればいいんだ、おめえなんぞの知ったことじゃあねえんだ」

「当人に訴えて出ろって」

「そのためにお上というものがあるんだ、しんじつ仁兵衛が悪人ならお上で放っておきゃあしねえ」

「だって爺いは放っておかれたぜ」

「それは油屋が御定法に触れなかったからよ、法に触れるようなことをしねえのに、ただ強慾というだけで縄をかけるわけにはいかねえ」

「そうらしい、そういうものらしい」

三之助の唇が少しあいて、それが見えるほどふるえた。顔には悲しみとも苦痛ともとれる、一種の絶望的な表情がかび、眼には涙が溜っていた。ひと際つよく、ずしんと家が震動した。また材木でも流れて来て当ったのだらう、佐平という男はびくりとした。

「貧乏人は貧乏だというだけで、自分から肩身を狭くしている」三之助は言った、「世間だって貧乏人などは相手にしやあしねえし、相手にされねえことは自分たちでよく知ってるんだ、血をしぼられるような非道なめに遭っても、お上へ訴えて出るより自分で死んじまう、どこへ出たって

貧乏人の言うことなんぞとおりやしねえ、金があつて、ちやんと暮している者にはかなわねえということを知っているからだ、おれもよく知つて、おふくろが握り飯五つ取つて泥棒と言われたのは、飢えていたからだ、おれたち一家が飢えてもいず、そんなに貧乏でもなかつたら、たかが握り飯の五つくれえお笑い草で済むんだ、おらあ、……仁兵衛をやつた、生かしてはおけなかつた、そういう弱い貧乏人の血をしぼり、娘を売らせ、裸で放り出し、おもい余つて三人も死なせやがつた、生かしておけばこれからもするやつだ、おらあやらずにいられなくなつてやつた、それだつて善いことをしたとは思やしねえ、決してそんなこととは思やしなかつた、だからこうして、この家と一緒に身の始末をしようとしたし、おめえが来ればおとなしく捉まりましたんだ、口惜しいけれども、やっぱりおれも貧乏人の倅なんだ」

「人並なことを言うな、てめえはどれほどの人間だ」男がやり返した、「きいたふうなことを言やあがつて、てめえは油屋を悪く言えた義理じゃあねえぞ」

「おめえにもおめえの理窟があるさ」

「きいたふうな口をききやがつて、おぎんやおたま、お幸やおまさのことはどうなんだ、てめえにくどきおとされ、身を任せて、棄てられて、泣きをみているあの女たちのことはどうなんだ」

「そいつはおめえにゃあわからねえ」

「あの女たちのことはどうなんだ」と男はたたみかけた、

「四人だけじゃねえ、ほかにもっとあるだろう、そんなに弱い女たちに泣きをみせて、それでてめえは非道じゃあねえというのか」

裏で屋根瓦の割れる音がした。やみかかつていた風がまた烈しく、戸障子を揺りたて、庇をかすめてするどく咆えた。

「そうだ、非道かもしれねえ」三之助は低い声で言った、

「けれどもしよがなかつた、自分でもどうにもならなかつたんだ」

「そう言えば済むと思ふんだな」

「おめえにゃあわからねえ」

激しい風の唸りが彼の言葉を遮ぎつた。そして、そのすどい唸りにまぎれて、一人の娘がこの二階へ巧みに忍び込んだ。佐平と同じように、裏から屋根を廻つて来たらしい。その娘は佐平と同じ廊下の端から、もつとすばしこくもつと巧みに忍び込んだ。頭からずぶ濡れで、手に襦袢を持っていた。その娘は足音をぬすむように、西の端の六畳へ入つたが、歩くにしたがつて畳が濡れた。

「おらあ騙すつもりはなかつた、一人も騙しやしなかつた、みんな本氣だつたんだ」三之助はまた眼をつむつた、

「どの一人とも本氣でいっしょになつた、けれどもみんないけなかつた、いっしょになつて暫らくすると、どうしても別れずにはいられなくなるんだ」